

西欧文化における柳の研究—その2

ナポレオンの柳

黒沢 眞里子*

はじめに

本論文は、「西欧文化における柳の研究—その1 墓石、追悼画および陶磁器」の第2部として、とくにナポレオンの柳に焦点を当てた研究である¹。第1部では、西欧文化におけるシダレヤナギ (*Salix babylonica*, 俗名 weeping willow, これ以降「柳」と表記) について、実際の樹木がいつ頃、どのようなルートで西欧世界に入ってきたのか、またどのような過程を経て西欧社会に「柳ブーム」(墓石や葬儀に頻繁に表象され、さらに「ブルー・ウィロー」陶器の流行) を生みだしたのか、画像も含めた一次資料に当りその意味について考察した。第1部で明らかになったことは、悲しみのシンボルとしての柳と、ブルー・ウィロー陶器に描かれた柳の図像の形象的影響関係は認められず、おそらくこれら二つの柳の表象は、西欧人の想像世界の中で住み分けされていたのではないかということであった。さらにその二つの世界は、一方では「愛国主義」や「男同士の友情」など男性のセンチメンタリズムと結びついた「男の公的世界」と関係し、もう一方は、想像世界「中国」のエキゾチズムに浸る、個人的な喜びと結びついた「女性の私的世界」と関係することが明らかになった。前者は、柳が欧米社会に初めて移植されたときの逸話の世界であり、後者はオリエンタ

*専修大学文学部教授

ルな風景と物語と結びついたブルー・ウィロー陶器の世界であった。

19世紀の柳の文化誌において、墓石や葬儀に表象される柳と、陶器と結びついた柳に加え、もう一つ重要な柳がある。「ナポレオンの柳」(Napoleon's Willow, Napoleon Willow)である。この柳は、セント・ヘレナ島に捕囚された元フランス皇帝ナポレオン・ボナパルト(1769-1821)と柳の木の逸話に由来する。ナポレオンの流刑の地セント・ヘレナ島で、ナポレオンがとくに好んだ場所が泉近くの柳の木の生えた谷間で、ナポレオンの死後本人の希望により埋葬場所となった。ナポレオンの墓所を訪れた人々は柳の枝を記念に持ち帰り挿木として育て、そのようにしてナポレオンの柳は各地に移植され広まった。現在もナポレオンの柳はニュージーランド、オーストラリアを中心に、ヨーロッパ、アメリカにも伝え継がれている。

柳の下のナポレオンの墓のイメージもまたすぐさま西欧文化圏に浸透し、彼らの想像世界の中に鮮明に刻印された。19世紀アメリカの中西部で死刑執行を目前にリンチで殺害された男が望んだ墓はセント・ヘレナのナポレオンの墓だった。その図が残されている(図9)。埋葬場所であるケンタッキー州の彼の故郷には、「セント・ヘレナ」と名づけられた島さえ存在した。ナポレオンの捕囚の島を「みたてた」島が実際に存在し、墓がイメージされたことにはどのような意味があるのだろうか。

本論では、ナポレオンの柳の逸話がどのように生じ、西欧世界に広まったのか、その文化的意味は何か、セント・ヘレナのナポレオンの回想録、セント・ヘレナを訪れた人々の記録、図像を中心に検討して明らかにしたい²。

ナポレオンのセント・ヘレナ捕囚

1815年6月18日ワーテルロー最後の決戦でイギリスとオランダの連合軍

とプロイセン軍に敗れたナポレオンは、その後イギリス艦に「自由意志で」投降するも、イギリス亡命の期待に反してイギリス領セント・ヘレナへ「島流し」となった。降伏から約4ヶ月後の10月15日にはセント・ヘレナに到着しており、1821年5月5日の死亡までの5年半、ナポレオンはセント・ヘレナ島での生活を余儀なくされた。

セント・ヘレナ島は、1502年（または1501年）航海者ジョアン・ダ・ノヴァ率いるポルトガル艦隊によって発見されたとされる南大西洋の火山島である³。周囲を断崖絶壁に囲まれ、アフリカ西海岸から1,950km、もっとも近い島アセンションからも1,100km隔たった文字通り絶海の孤島である。外界から隔絶された感のある島だが、スエズ運河開通（1869年）までは、アジアや南アフリカ、オーストラリアやニュージーランドなど南太平洋を往復する船の重要な寄港地であり、海上の要衝であった。ナポレオンが捕囚されていた当時、年間1,200隻もの船が寄港していた⁴。島名は、古代ローマ帝国コンスタンティヌス1世の母親で、キリスト教の聖人である聖ヘレナに由来する。ポルトガル、オランダを経て1651年よりイギリス東インド会社の領有となり、1815年まで継続された。1815年にナポレオンの居住地となるに及び、イギリス政府と新たな取り決めがなされた。国王によって全権を委任された総督が任命され、ナポレオン捕囚に付随する費用はイギリス政府が負担することになる。ナポレオンの死後は東インド会社に領有が戻され、1834年4月22日イギリス政府の領有となるまで続いた。ナポレオンの捕囚によって多くの陸海軍の駐屯地が新たに造られている⁵。

ナポレオンが居住したログウッド・ハウスは、港のあるジェームズタウンから約9km離れた標高548mの高台にある。ナポレオンは島に到着後、現地イギリス人商人が所有するブライアーズ・パビリオンに仮住まいをした後に、新たに建設されたロングウッド・ハウスに移った。5年半の島での生活を経て、その生涯をここで閉じたのである。

ナポレオンの死と、柳と泉のある場所への埋葬

ナポレオンの死亡から埋葬までの過程を、ナポレオンに随行したイギリス海軍外科医 B. E. オミーラ医師等によるセント・ヘレナ回想録をもとに見ていきたい（1822年米国で出版された版）⁶。ナポレオンは、特に死の6週間前くらいから体が弱ってきた。寒暖の激しい、湿潤な島の高地の気候、きわめて活動的であった人間がほとんど運動をしない生活になったことなど、環境の大きな変化が健康を蝕ばんだとオミーラは書いている。そして5月5日ナポレオンはセント・ヘレナにて、「51歳10ヶ月25日」の人生を終えた。遺体は、医師らによって解剖が行われ、死因は胃癌とされた。しかし、時間をかけて毒殺されたのではという疑惑を持つ者もいたと記されている。ナポレオンが死ねば、彼の捕囚にかかる年間200万ドルの経費が浮き好都合だったからだと説明されている。死の数日前に、ナポレオンは、遺書をつくり、埋葬場所を指示した。死後、遺体はロングウッド・ハウスの寝室に安置される。

4日後の5月9日盛大な葬儀が執り行われた。ナポレオンが希望した埋葬場所は、ロングウッド近くの、2本の柳の木の間であった。棺は一番中に鉛の棺、次にマホガニーの棺、さらにオークの棺という順に収められ、黒の馬車に乗せられた。馬車の後には、陸海軍のすべての指揮官の葬列が続く。馬車は、道路端に整列した二千人の兵士の軍団と4つの軍楽隊に迎えられ、埋葬場所まで運ばれた。徒歩の葬列は、葬儀のために新たに造成された道を下がっていった。棺は墓所まで運ばれ、この日の為に用意された大きな石室に、甲冑に送られ降ろされた。墓穴の中の石室に厚い石の蓋がかぶせられ、四隅を石室にしっかりと固定された。そして、全体にセメントが流し込まれ、その後、墓穴全体に石を入れ、その上にシンプルな石版がのせられた。このようにオミーラ医師は葬儀の詳しい説明をしているが、2本の柳に触れているのは1カ所だけでとくに柳に注目した感傷的な

描写はない。

ナポレオン死去のヨーロッパへの伝達

ナポレオン死去のニュースはヨーロッパに伝えられ、早くも1821年7月にはイギリスの新聞や雑誌で報じられている⁷。ロンドンで出版された雑誌の7月号に、「ボナパルトの葬儀—5月15日付セント・ヘレナより送られた手紙からの抜粋」とボナパルト（記事では「ナポレオン」の表記は避けられている）の葬儀の様子が報じられている⁸。訃報記事には、ボナパルトが自ら望んだセーン・ヴァリー（Sane Valley）に埋葬されたこと、将軍の最高ランクの形式で葬儀が行われたこと、モンロン伯爵、ベルトラン将軍、喪服姿のハドソン・ロウ総督夫人と娘たち、海軍の下級士官、陸軍士官、最後尾にハドソン・ロウ総督と最高司令官が葬列を成したことや、各部隊の三千人の兵士たちが周りの丘の中腹で葬儀を囲むように整列していたことなどが詳しく記されている。墓については、約14フィート（約4.3m）⁹の深さで、上部は広く、底は棺を納める石室になっていたことや、一番上に大きな石版が置かれ、その間は石でしっかりと埋められ、遺体が運びだされないよう細心の注意が払われたことなどが述べられている。

ナポレオンが埋葬された場所に関しては、この記事では「ロマンチックな場所」と形容されている。ハッツ・ゲート（Hut's Gate）と呼ばれる近くの谷にあり、ここが選ばれた理由が説明されている。ナポレオンの一行がセント・ヘレナに到着した時、ベルトラン将軍と家族は、彼らの住居が完成するまでハッツ・ゲートに住んでいた。ナポレオンはベルトランの家族を度々訪ね、そこからさらに下った泉のある場所までよくいっしょに歩いた。島一番良質なこの水をナポレオンは中国人の召使いに汲みに行かせたという。ベルトラン将軍夫妻はいつもナポレオンに付き添い、ナポレオンが「もし、自分がこの岩塊の上（on the rock, セント・ヘレナのこと）



図1 1823年3月8日発行の『ミラー』紙

で死ぬことがあったら、ここに埋葬してくれ」と度々話すのを聞いていた。ナポレオンが指差したのは、泉の近くの柳の木々の下であった。この記事は、ここで終わっているが、翌月8月号の冒頭ナポレオンの肖像画とともにナポレオンの回想記事を集めている。「イギリスの宿敵・・・ナポレオン・ボナパルトはもはやいない・・・」という書き出しの記事は、ナポレオンを非難する論調で、埋葬場所に関しても、「柳」に触れているが、「ロマンチックな場所」という表現はない¹⁰。前月号の記事はセント・ヘレナから送られた手紙の中で使われた「ロマンチックな場所」という感傷的な表現をそのまま掲載しているが、改めてナポレオン死去をイギリス国民に伝える翌月の記事では、論調が一貫して「敵」としてのナポレオンに終始し、このような表現はない。

1823年3月8日ロンドンで発行された『ミラー』紙は、第一面に「セント・ヘレナのナポレオンの墓」と題して、誌面の半分も占める柳が描かれた図版とともに記事を掲載している（図1）。「ナポレオンほど世界の注目

を集めた人物はかつて存在しだろうか」、「世界を相手にした男が、今やこの場所に横たわっている」という書き出しで、ナポレオン（この記事では「ナポレオン・ボナパルト」、または「ナポレオン」が使われている）の生涯を紹介しながら、最期の詳細な説明がなされている。埋葬場所に関しては、側近たちは遺体をヨーロッパに搬送することを希望したが、遺書を開いてみると、島に埋葬して欲しいと書かれていたために、ナポレオンが望んだ、住居からも遠くない美しい谷の麓、好んで飲用した泉の近くの、うっそうと茂った柳（強調筆者）が揺らぐその下を埋葬場所としたとある。ナポレオンの墓は、この並外れた人物に相応しい、類い稀な場所だという。島自体が彼の墳墓であるからだ。大洋から突き出た、堂々とそそり立つ不動の大岩石の孤島、まさに天才に相応しい完璧な象徴だ、と述べられている¹¹。

この後に、興味深い逸話が続く。ナポレオンの死後間もなくセント・ヘレナを訪れたロカビリー船長の話として語られたものだ。彼がナポレオンの墓を訪れ、偉大な男のすべてがこの小さな場所に納められているのかと、感概にふけっていると、インドからイギリスに帰る途中立寄ったという婦人たちに出会った。好奇心から墓を訪ねたという。飲み物を持参して、芝の上に座って休息をとっていた。一人が、ナポレオンが好んで飲用したとされる井戸の方向に歩いて行き、そこから水を汲んで皆に分けた。船上の生活が続いたせいでおいしく感じたのか、皇帝の座から世捨て人になったナポレオンを思っか、一人の女性が真面目顔で「こんなおいしい水を飲めたなんて、ナポレオンはなんと幸せだったのでしょ！」と言った。この哲学的な言葉に船長は心を打たれた。純粋な水が、健康も自由も権力も、そして愛情あふれた家庭さえも奪われた男の解毒剤だったというのだから。婦人たちは、瓶に井戸の水を注ぎ、その澄んだ水をイギリスに持ち帰りたいたいと言うので、船長も彼女たちに習い、瓶に入れた水をリバプールまで持ち帰ったそうだ。また、他の文献でも、この小川の水はナポレオンが好ん



図2 ガイ・ロトン大尉によるナポレオンの墓の絵(1821)

で毎日飲用したもので、具合が悪い時にはとくに所望したとある¹²。柳に加えて、湧き水も、健康を回復させる「聖水」になったと言えるだろう。幽閉されたナポレオン自身にとっても、そのような意味をもって飲用されたと思われる。シャトーブリアンは、この泉に関してナポレオンは「もし神が健康を回復させてくれたら、ここに記念碑を建てねばなるまい」と言ったと述べている¹³。

ナポレオンの墓の図像

ナポレオンの墓を忠実に描いたもっとも初期の画像の一つとして、島に駐留していたガイ・ロトン大尉(Captain Guy Rotton)が1821年に描いたとされるものがある¹⁴(図2)。絵には、大きな柳の木が数本描かれ、その後ろに柵で囲まれたナポレオンの墓、左端には墓の警備にあたる兵士の姿、その横に警備小屋らしきものが小さく描かれている。柳と墓の周りは柵が大きく取り囲んでいる。絵に感傷的な雰囲気はなく、オミール医師の



図3 フレデリック・マリヤットのスケッチを元に出版された絵(1821年7月20日)

回想録のように、事実が淡々と描かれている。

図3は、セント・ヘレナの警備船のキャプテン・フレデリック・マリヤット (Captain Frederick Marryat) のスケッチをもとに作成された銅板画である。彼はナポレオン死去の急報をイギリスに届ける任を与えられた人物であるが、死の床につくナポレオンを描いたスケッチ（死後14時間後に描いたと記されている）が良く知られている¹⁵。墓の絵は1821年7月20日に出版され、枠下の説明には、「ナポレオンの墓、本人の希望により、毎日水を汲ませ食卓に供した泉の近く、柳の木の下に埋葬された」とあり、「水」と「柳」に言及されている。大きな柳と、左下植物のなかには泉のような流れが描かれている。図2と図3を比べると、図3には、墓所の周りを囲む簡単な柵はあるものの、墓そのものを囲む鉄柵はまだないので、時期的にはこちらの絵の方がロトンよりも早い時期、おそらく葬儀の直後に書かれたものだろう。警備兵はいるものの、警備小屋はまだなく、右端にテントの一部が描かれている。ロトンの絵に比べると、柳が大きく強調されて描かれている。図1の『ミラー』紙のように、「うっそうと茂った」



図4 1830年代に出版されたオランダ語の本のさし絵

柳が全面に大きく描かれている。

次に、オランダ語の出版物（おそらく旅行記）に掲載されたナポレオンの墓を見てみると、柳の真後ろから左側に回り込んだ構図が取られ、柳を右、その横に墓という位置関係になっている¹⁶（図4）。多くのナポレオンの墓のイメージは、この構図が一般的である。この記事や絵の詳細は不明である。ロトンの絵のように基本的に写実的ではあるが、複数の柳（左に1本離れて描かれている）の木は図2に比べると、その姿も、一列に並んだ描かれ方もより抽象化・形式化されている。絵のフレームを構成するように木が左右1本ずつ描かれ、住居を望む小高い山の上には常緑針葉樹が複数並んで描かれるなど、19世紀初頭に流行する追悼画の形式を思い起こさせる。

旅行画家オーガスタス・アールによる1829年のナポレオンの墓の絵は、さらに抽象化されている（図5）。図4と同じ方向から描かれた柳はシンボル化され、墓所に独特のメランコリーな雰囲気を与えている。

図6は、1836年7月、チャールズ・ダーウィンのビーグル号がセント・



図5 オーガスタス・アールによるナポレオンの墓（1829）

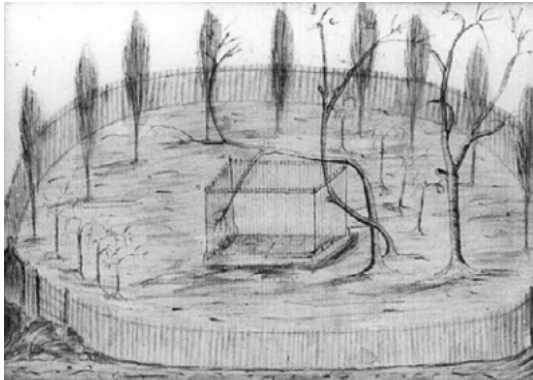


図6 1836年にダーウィンの助手が描いたナポレオンの墓

ヘレナに寄港したとき、助手のシムズ・コヴィントンが描いたナポレオンの墓のスケッチ画である。ダーウィンは、ナポレオンの墓について少々辛辣な印象を日誌に書き残している。それによると「石を投げたら届きそうな距離の」墓所近くの宿に泊まったが、「周りには複数の小屋があり、道路は人の往来も多く」、思い描いていた偉大な人物の崇高な墓にしては違和感があると率直な意見を述べている¹⁷。奥まった谷底にある墓所は本来人里離れた辺鄙な場所のはずだが、ナポレオンの死から15年もたち環境が

変化したのだろう。墓地の地主が補償金をもらい、そばに小店を開いてドライフラワーや泉の水の瓶詰めを売る商売を始めたというので¹⁸、この頃には、きっと小屋も増え、訪れる人を泊める宿もできていたのだろう。19世紀半ば、ジョージ・ワシントンの墓を訪れた人物が、神聖なはずのワシントンの墓のすぐ横で、銀板写真をとる商売がすっかり定着して小屋までできていることを、神聖な場所への冒涇と憤っていたのと同じ現象が、遙か遠くの孤島セント・ヘレナでも起きていたということだ¹⁹。しかも、セント・ヘレナの方はその場所を「墓」と呼ぶのはばかられるとダーウィンは注釈でわざわざ断っている。というのもナポレオンの墓は多くの雄弁家の言葉によって、島自体が壮大な墳墓に例えられているからだという。ある旅行者などは、このちっぽけな島を、「grave, tomb, pyramid, cemetery, sepulchre, catacomb, sarcophagus, minaret, and mausoleum!」と9通りの言葉を使い、大それた墳墓そのものにしてしまっていると述べている²⁰。

ダーウィンの助手、コヴィントンは日誌でより客観的な詳しい説明をしている。墓のある谷には、畑 (gardens) や家々があり、墓は何も書かれていない大きな長方形の石が置いてあるだけの、偉大な人物の墓にしては簡素なものだったと述べている²¹。墓は鉄柵で囲まれ、さらに見学者が歩けるだけのスペースを残し、5, 6 m 離れた外側には木製の柵がある。美しい芝の中には柳とイトスギがあることも述べられ、絵に描かれた針葉樹らしい複数の木がイトスギであることが分かる。柵の外側には、ナポレオンが水汲みにやらせた澄んだ井戸水があることにも触れられている。また、墓の東の柵の内側にはワレン提督の夫人と娘が植えたゼラニウムがあることにも触れられている。

柳に関しても言及しており、墓を守る私設の老兵がいて、柳の木に指一本触れさせないよう警備しているが、イトスギの小枝は持ち帰ることが許されていたと述べられている。コヴィントンの簡単なスケッチを見ると、



図7 1837年に出版された *Een bezoek op het eiland St. Helena in October* の中のさし絵。

気温が低くなる7月に落葉をしているのか葉がほとんどないような姿の柳と柵の周りにまだ若いイトスギが何本も植えられている様子が分かる。同じく若いイトスギが描かれた同時代の絵もある（図7）。この絵には、子供連れや男女のカップル、警備兵に話しかけている男性などが描かれ、初期の図4や5の絵に比べると、より明るい雰囲気、観光名所として整備されてきた様子がうかがえる。

イトスギは初期の墓の絵には描かれていないので、おそらく、墓の整備をするなか、観光名所化する過程で、柳とともに葬送のシンボルでもあるイトスギが植えられたのだろう。それを押し進めたのは、どうもセント・ヘレナの総督であったようだ。柳の寿命は短いので、総督によって親木からの挿木がなされ、イトスギも植えられたことがマンディ船長（Captain Mundy）のセント・ヘレナ探訪記の記事に書かれている²²。

セント・ヘレナのナポレオンの墓は、その柳が重要なシンボルであったことは間違いなく、広く普及して人々の心に強い印象を残した為に、実際

の墓地をみてがっかりする体験も記録されている。1852年にセント・ヘレナを訪れたエドワード・トール (Edward Towle) と同行者たちが墓を訪れたとき、「ようやく美しい小さな谷が見えた。端には柳が見えたが、印刷物にあるように優美でも、豪華でもなかった」と落胆した印象を書き残している²³。

セント・ヘレナはイギリスのピクチャレスクな風景

ダーウィンは、セント・ヘレナの植生についても調査し、島がイギリスの風景 (実際には「ウェールズの風景」と言っている) に酷似していることに驚いている。それは「まったくイギリスの面影を具えた植物」が植えられていることによる。丘に不規則に植林された「スコットランドもみの木」、傾斜した岸の「はりえにしだ」、そして生け垣には「ブラックベリー」、細流の岸にふつうに見られる「しだれやなぎ」をあげている。そして、当時島に見られる植物の746種類のうち、52が土地固有の種で、「その他は主としてイギリスから移入されたものである」と述べられているので、イギリスから持ち込まれた植物がイギリス的な景観づくりあげていたことは間違いない²⁴。さらに別の文献でも、東インド会社が他の木とともに柳も島に持ち込み、墓のある谷にも植え、ナポレオンが島に来る前に育っていたという記録もある²⁵。

オーストラリアの1834年の『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙は、さらに具体的な内容で、セント・ヘレナのビートソン総督 (Akexsander Beatson, 東インド会社の役員で試験的農業の推進者) が、1810年に島にイギリスから持ってきた多くの柳を植えたと述べている。その中に、シダレヤナギもあり、谷の泉近くにも植えたところ、大きな木に生長し、それが、ナポレオンが木陰で休息をとったあの柳であると説明されている²⁶。

イギリス的な柳に加え、1826年のオーストラリアの新聞は、セント・ヘ

レナのナポレオンの墓には7本の柳とともに、「English grass」（イギリスからアメリカやオーストラリアに持ち込まれたブルーグラスなどの家畜用草）²⁷が墓を覆っていることに触れている²⁸。ナポレオンの墓所がイギリス領のセント・ヘレナであったことによって、イギリスのロマンチックなピクチャレスクな風景の中のナポレオンの墓のイメージができあがったといえる。それは、ヨーロッパ大陸の幾何学的な整形庭園が示すような権力を誇示する景観とは異なる島国イギリスの自然風で感傷的な景観であった。

「記念物」としての柳の枝

ナポレオンの柳の木は葬儀当日から、記念物として枝や幹を持ち帰ることが行われた。ナポレオンの従僕ルイ・マルシャンは以下のように書き残している。

葬儀が終わった時、すでに多くの参列者が崇拜の対象となっていたヤナギの木に飛びかかって枝をもぎ取っていた。悲しい儀式的思い出を欲する人々に一瞬にして裸にされてしまいかねないヤナギの木を守らねばと、総督は直ちに彼らを追い払わせた。島民の側からすれば、このようにむげに追い払われたことも、皇帝に対する総督の行為に反感を募らせる一因となったのではあるまいか？墓の周りには仮のバリケードが建てられ、二人の歩哨が警戒に当たり、一人の将校と十二人の兵卒からなる部署が設けられた。ロングウッドに戻る前、総督は、将来の皇帝の亡骸に蔭を落とすであろうヤナギの木の枝を私たちに一本ずつもぎ取ることを許した²⁹。（藪崎利美訳）

医師のアントムマルキも、その回想録の中で、この様子を以下のように記している。

このように、[埋葬が終り]墓の最後の工事をしている間、人々の群れは柳の木に我先にと駆け寄った。ナポレオンの存在により、それはすでに崇拝の対象（強調筆者）となっていた。死者を悼む厳かな情景を心に留め置くために、偉大な人物の墓を覆うこの柳の枝や葉を記念に持ち帰りたいと人々は願った。ハドソンと提督は、このような感情にかられた行為を不快に思い、怒鳴り散らしてやめさせようとした。しかし、それも効果なく、柳の木は、手の届く範囲葉も枝も丸裸となった。ハドソンは、怒りで顔が青くなった。しかし、違反者は大勢で、あらゆる階層に及んでいた為に、罰することもできなかった。しかし、彼は反撃にでて、墓の周りを柵で囲み、2名の見張り番と12名の警備兵、士官を置き、人々が墓に近づくことを禁止した。しかも、警備兵をそこに常駐させたのである³⁰。

葬儀も済んでセント・ヘレナを後にする前日の5月26日、ベルトラン夫妻、モントロン、アントムマルキ医師も含めたフランス人一行はロングウッドを引き上げる途中、ナポレオンの墓に最後の別れを告げるためにやってきた³¹。スマレヤパンジーが咲き乱れる中、涙を流しながら永遠の別れを悲しみ、記念に柳の枝を数本折ったが、兵士たちはそれを拒めなかったとアントムマルキは書き残している³²。それらの兵士の一人と思われる人物が書き残した別の記録によると、フランス人二人に柳の小枝を折ることを許すと、「この品は自分たちにとっては金の冠よりも貴重（強調筆者）である」と感謝されたと述べられている³³。

このようなことが続いたのだろう。ついに、フランス人士官たちが、数本の幹を柳から切り取って記念物として本国に持ち帰った事件によって、ナポレオンの墓の周りは強固な木製の柵が設けられ、人が柵の中に入らないように老齢の警備兵が近くに寝泊まりをして見張るようになったと1826

年のオーストラリアの新聞は報じている³⁴。とはいえ、1829年出版の航海記では、探検家ピーター・ディロンがセント・ヘレナのナポレオンの墓を訪ねた時、墓を守っていた老負傷兵が、墓のそばの柳の木の枝を数本一行に差し出したと述べているので、その後も警備兵自らが柳の枝を記念物として訪問者に提供していたことが分かる³⁵。

1836年のダーウィンが訪れた頃になると、すでに述べたように、柳の枝を折ることは厳しく禁じられ、記念物として持ち帰ることが許されていたのはイトスギのみだった。それでも多くの柳の小枝が持ち出されたことだろう。警備兵に見つかって取り上げられたという話も記録されているが、見つからないで持ち出した人も多くいたはずだ³⁶。墓を訪れる者誰もが柳の枝を少しずつ持ち帰り、「神聖な寺院の聖遺物」のように大切なものとなった³⁷。このような記述を当時の新聞や雑誌の記事から容易に見つけることができるからだ。

かくして、1840年代にもなると、ナポレオンの柳は、シェークスピアの桑の木と並んで、民衆にもっとも人気の高い記念物の一つになったと、民衆の妄想と愚行について書いたチャールズ・マッケイに言わしめるまでになった³⁸。

ニュージーランド、オーストラリアのナポレオンの柳

ナポレオンの柳の枝は挿木として母国や移住地に持ち帰られ、「ナポレオンの柳」としてあちこちに植えられ、語り継がれる「伝説」あるいは「歴史」の木となった。とくに、オーストラリアやニュージーランドには、ナポレオンの柳の逸話が多く残る。イギリスとの往復で船がたびたびセント・ヘレナに立ち寄ったからである。ニュージーランドとナポレオンの柳でウェブ検索をかけると、セント・ヘレナのナポレオンの墓から柳の枝を持ち帰って挿木にした話が各地に見つかり、決まってそのようにして根づい

た柳が挿木でさらにニュージーランド全土に広まったと語られている。例えば、1908年の『ニュージーランド・ヘラルド』紙は、「ニュージーランドに植えられたナポレオンの墓の柳」と題して、もっとも初期のニュージーランド移民のジョン・ティンラインが1850年イギリスからの航海の途中セント・ヘレナに寄り、ナポレオンの墓から柳の小枝をとってジャガイモにさして持ち帰ったという話を載せている。それをニュージーランドのネルソンで植えたところ、すばらしい木に生長した。数年後にティンラインはカンタベリー州に挿木をもっていき、それが川の土手のあちこちで大きく生長しているのを目撃したと書かれている。それがさらに多くの川辺に植えられ、小さな挿木から、大木に生長したという。大木になったというのは誇張とも言い切れず、ダーウィンも、イギリスの植物は他に移植されると母国よりも大きく生長するようだと述べている。しかし、話の方はさらに誇張され、「実際、ニュージーランドのすべての柳はこの柳が親だと言っても間違いではないだろう」と結ばれている。そして、最近高齢で亡くなったティンラインについて、彼の柳は、深刻な問題をもたらした他の植物とは異なり、新天地にうまく適応し、その成功の証を見るまで彼は長生きしたのである、と記事は締めくくられている³⁹。

オーストラリアもまたナポレオンの柳に関して多くの記録・逸話が残っている。先に触れた『シドニー・モーニング・ヘラルド』（1834）紙は、ナポレオンの墓にあった柳はナポレオンが死去した頃に強風で倒れたが、ベルトラン將軍の夫人が挿木を墓の周りに植え、その一本が大きく育ったこと、その木から取られた数多くの挿木がイギリスに渡り、ナポレオンの柳として栽培され広まったことに触れている。同じ時期に、イギリスからオーストラリアに向かう多くの船がセント・ヘレナに寄港し、乗船者たちがその柳の挿木を持ち帰り、そのいくつかは、シドニーの植物園の池の柳の祖先であると述べられている。さらに、オーストラリアのニューイングランド地域（ニューサウスウェールズ州）の川縁に生えている柳の多くは、

地元住民によると同じ先祖から生まれているという。同州のバサーストとその周辺の美しい景観は、初期の移民たちがあらゆる川岸に柳を植えた努力の賜物であり、その軽やかな緑の葉がオーストラリア固有のリヴァー・オークと鮮やかな対照を成している。テュマツ川（ニューサウスウェールズ州南東部を流れる川）流域は、イギリスとオーストラリアの木がうまく解け合い、美しい景観をつくりあげているよい見本であると述べている⁴⁰。イギリスを代表する柳が、土着の植物と美しく混じり合っている姿は、（植民地）社会の理想でもあったのだろう。柳が加わったことにより、景色がより美しくなったというニュアンスもうかがえるような文章だ。

1939年7月25日の『マーキュリー』紙（タスマニア州ホバート発行）は、「ナポレオンの墓からやってきた柳」と題する記事で、タスマニア州プレんティのサーモン・ポンドにある柳が実はナポレオンの墓から直接取ってきた柳であることが最近明らかになったと報じている。タスマニアではそのような歴史的背景はほとんど知られていないが、オーストラリアからもってきた古い家族の記録を調べていたイギリス人が、『タイムズ』紙に寄せた記事で明らかになったという⁴¹。それによると、ニューノーフォーク近くに住んでいた夫妻がホバート港に停泊していた船の船長に昼食に招かれたときに、「お土産」代わりにセント・ヘレナのナポレオンの墓から取ってきた柳の小枝を差しだされたそうだ。枯れかけかなり乾燥していたが、帰宅して夫人が川縁にさしたところ、柳はサーモン・ポンド近くのダーウェント川に枝を垂らす立派な木に生長したという。さらに、同紙は2日後にも「歴史的樹木」のシリーズで、キャンベラの柳の歴史を紹介している。ナポレオンの警備兵であったバルコム（Balcombe）が、ナポレオンの死後柳の小枝をもってオーストラリアに移住し、その多くをキャンベラ近郊の土地に植え、その柳が生長するとキャンベラを流れるモロンゴ川沿いに植林されたという⁴²。



図8 マサチューセッツ州プロヴィンスタウンのナポレオンの柳

アメリカのナポレオンの柳

アメリカにも多くの場所でナポレオンの柳の記録や逸話が残っている。アメリカ海軍のウィリアム・ベインブリッジ提督が南ヨーロッパからニューヨークに帰還したときに、セント・ヘレナのナポレオンの墓から柳の枝を持ち帰り、ニューヨークのブルックリン海軍造船所の端に植えたという話が伝わっている⁴³。

マサチューセッツ州のプロヴィンスタウンにも、ナポレオンの柳が伝わっている。ケープコッド先端にある港町プロヴィンスタウンは、世界中からさまざまな物がもたらされた。郷土史によると、樹木も世界各地から移入され、ナポレオンの墓の柳もそのひとつだったという⁴⁴。1911年の消印の押された「ナポレオンの柳」の絵はがきには立派な柳が写っており、歴史的樹木であったことがうかがえる（図8）。

ジョージ・ワシントンのマウント・ヴァーノン（ヴァージニア州）のナポレオンの柳は、「ジェネオロジー（家系）」の逸話で語られている。1835

年にフランス人の海軍士官がナポレオンの墓から挿木を持ち帰り、その柳がフランス政府によってアメリカ合衆国に贈られたという。その柳はマウント・ヴァーノンのワシントンンの墓のそばに植えられたが、南北戦争後に、西部に移住した士官によってその挿木がワシントン準州にもたらされた。シアトルの町を見下ろす丘の上の新居の庭に植えられた柳はよく育った。1962年に市当局が、息子の代になっていたこの土地に高速道路を計画し柳を撤去することになった。庭の柳の話聞かされて育った息子が、柳をどうしても守りたいと市を説得し、挿木をとって適切な場所に移植させたという。かくして、セント・ヘレナの柳の系譜は断たれずに継続された。この記事に掲載したシアトルのジェネオロジー財団のニュースレターは、この木がたどった180年の歴史を、物理的に遠く離れた4つの地域にたどり、それを「ジェネオロジー」と呼ぶのは無理があるかもしれないが、祖先の歩んだ道筋を遠くの地までたどろうとするわれわれの努力とかけ離れているわけではないと記事を結んでいる⁴⁵。

リンチで殺された男が望んだセント・ヘレナの墓

ケンタッキー州生まれの、一介の市井人アドルフ・ファーディナンド・モンロー（Adolphus Ferdinand Monroe）が歴史に名を残しているのは、死刑が確定していたにも関わらず、暴徒によって処刑の前に殺されたリンチ事件の犠牲者だったからである。市民権の歴史など法制史の研究で取り上げられるほか、ほとんど知られていない。モンロー自身は慎ましい生活ながら教養のある男で、事件を起こした後に自分の生い立ちと事件と裁判の経緯を著した手記を出版している。筆者が注目したのは、自分の墓をセント・ヘレナのナポレオンの墓にして欲しいと願ったからである。スケッチも添えられており（図9）、スケッチ下の説明文には、「もし私が死んだら、ケンタッキーに連れ帰ってくれ—ここから故郷に連れ帰り、ファ

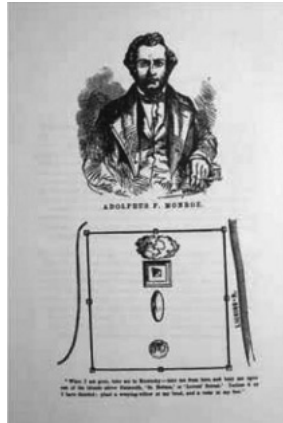


図9 セント・ヘレナの墓を模したモンローの墓の図。

ルマスにある島のひとつ、『セント・ヘレナ』か『^{ラヴァース・リトリート}恋人たちの隠れ家』、に埋葬してくれ。図のように墓を囲み、頭の部分に柳を、足下にシーダを植えてくれ」と書かれている⁴⁶。

悲惨な最期を目前にして、セント・ヘレナの墓を抛り所とするほど、ナポレオンの墓は彼にとって意味あるものだった。そのモンローとはどのような人物だったのか、彼の書いた手記をもとに考えてみる。

アドルフ・ファース・ファーディナンド・モンローは、1827年11月6日に、ケンタッキー州ペンドルトン郡ファルマスに生まれた。幼い頃父親を亡くし、母の手ひとつで育てられた。貧しくともよい教育だけは受けさせたいという母の意向で、初等教育を受けたモンローは教師となり、1852年2月イリノイ州のチャールストンに移るまで教師をしていた。

モンローの故郷ファルマスは、リッキング川の本流と支流(サウス・リッキング川)が交わる場所に位置する美しい村と描写されている。詩人や画家の詩心、絵心に訴えるような風景だという。美しい景色の背後には、インディアンの襲撃など血塗られた暗い過去もあり、そのような土地柄が若きモンローに影響を与え、早熟で、頭の良い、気がはやく、情熱的で、

多感な気質を育んだ。この村の、自然豊かでロマンチックな風景をイリノイ州のチャールストンに移った後もずっと忘れず、幼少期の思いの中で神聖化された場所として、情熱をもって語っている。初めて教育を受けた学校、1人で瞑想にふけた柳の木が繁る島、そして川である。その流れは、彼がこの手記を書いている時に、目に見え、耳に聞こえていたという。

モンローは身長1メートル80センチの長身で、ほっそりとして、繊細、女性のような美しい顔立ち、亜麻色の髪、深いブルーの目、広い額、高尚で知的で女性にもてるタイプだったと書いている。

イリノイ州のチャールストンに移ってから、彼はドラッグストアの店員となり、1853年の春、ナンシー・エリントンと知り合いすぐに恋に落ちた。彼女は、ネイサン・エリントン（地元の名士でコール郡初代書記）の娘で、親の強い反対を何とか切り抜け、1853年12月12日に結婚式し、夫婦には娘も生まれた。

未熟な妻と、妻の両親（とくに母親）の過度な干渉、妻の両親の娘婿の家族への軽蔑的な態度等がモンローと義父とを激しく対立させ、ついに義父と通りで激しい口論となったモンローは、拳銃で義父を殺害してしまう。1855年10月19日のことだった。コール郡初代書記官が娘婿に撃たれて殺害されたと各地元紙は報じ、大事件となった。翌年の1月24日に裁判で有罪となり、絞首刑が言い渡される。2月に刑が執行されるはずだったが、刑の執行が延期されたことが引き金となり怒った暴徒が、刑務所を襲い、モンローをリンチで殺害してしまった。

彼の遺体は妻によって鉄道でケンタッキーに運ばれたことが新聞で報じられている⁴⁷。実際の埋葬場所は、1946年6月8日にファルマスを訪れた二人の婦人が、地元の人案内でモンローの墓を訪れた手書きのメモにより特定できた。それによると、モンローは彼自身が図で示したとおりにリッキング川近くのブルー・ベル・アイランド（元セント・ヘレナ）に埋葬されていた。しかし、1946年には墓と分かる物は何も残されておらず、頭

の部分に植えられた柳も、足下に植えられたシーダもなくなっており、枯れた柳の切り株のみ見つかったと書かれている。地形がかるうじてかつての面影を残しているだけだったという⁴⁸。

モンローから最も信頼され、手記の出版をまかされた義弟（3歳下の妹の夫）の名前がナポレオン・ボナパルト・オーリック (Napoleon B. Aulick) であった⁴⁹。なぜ、ナポレオン・ボナパルトと名付けられたのか資料がなく不明であるが、彼が誕生した1830年までには、これまで考察したようにナポレオンに関する記事や画像が多く出版され、またアメリカ大衆の意識の中でナポレオンの存在は、ジョージ・ワシントンを凌ぐ破格の地位を与えられていたという研究もあり⁵⁰、そのような環境でアメリカ中西部の「ナポレオン・ボナパルト」が誕生したのだろう。それにしても、ケンタッキーの片田舎に「セント・ヘレナ島」が存在したことや、そこには柳が植えられ瞑想の場所であったこと、悲劇的運命を背負わされたモンローがそこを自分の埋葬場所に希望したことなど、ナポレオン、とくにセント・ヘレナのナポレオンの影響が、このような場所にまで浸透し、具体的な形をとって存在したことは、ナポレオンの柳がいかに大衆にインパクトを与えたか示すよい証拠だろう。

第16代大統領アンドリュー・ジョンソンのナポレオンの柳

リンカーンの暗殺後大統領となったテネシー州選出のアンドリュー・ジョンソンは、大統領職退任後の1875年7月31日67歳で病死した。彼の葬儀は自宅のあるテネシー州グリーンヴィルで、フリーメイソンが主導して行われたことが当時の新聞で報じられている。埋葬場所は、グリーンヴィルの南西半マイルにあるジョンソン・ヒルであった。眼下にグリーンヴィルを望む丘にある50エーカーのこの土地はジョンソンの所有で、自分の埋葬場所に柳を植えて印をつけておいたという。その柳は自宅の庭に植えら

れていた柳からとった挿木で、元はセント・ヘレナのナポレオンの墓から取ってきたものだった⁵¹。海軍のキャプテン、ウィリアム・フランシス・リンチ（Captain William Francis Lynch）が1850年代に西インド諸島を巡洋中にセント・ヘレナから持ち帰った柳の挿木を当時下院議員だったジョンソンに贈り、ジョンソンはそれを自宅の裏庭に植えた⁵²。8月11日の地元紙は、「レリック・ハンター」とう小見出しでジョンソン元大統領の葬儀が行われているさなか、多くのレリック・ハンターたちが、仕立屋（かつて元大統領が働いていた）の布端や、墓の盛土の石ころとともに、元大統領の自宅庭のナポレオンの柳の枝をとって持ち帰ったと書いている⁵³。ジョンソン元大統領の裏庭に植えられた柳は、セント・ヘレナの柳の直系として、その逸話とだぶりながら人々の想像力の中で増幅され、セント・ヘレナの柳はさらに拡散していった。ジョンソン元大統領のナポレオンの柳は2012年にテネシー州の歴史的樹木に指定されている。

ジョンソン元大統領が死去した1870年といえば、ナポレオンの死からすでに半世紀近く経っている。元大統領のセント・ヘレナの柳を報じた記者の一人は、四半世紀前にはやっていたセント・ヘレナの柳の歌を突然思いだし、その歌詞で記事を締めくくっている⁵⁴。それは、ヘンリー・ステイヴンソン・ウォッシュバーン（Henry Stevenson Washburn）の詩にライマン・ヒース（Lyman Heath）が曲をつけた「ボナパルトの墓」という歌であった。1840年代に流行して広く歌われたのだろう。1835年出版の書籍にも詩が引用され⁵⁵、その後多くの本に引用されている。この記事は、当時の流行歌が、アメリカ人大衆のナポレオン・イメージ形成の重要な役割を担っていたことを伝えている。

おわりに

西欧文化における柳の文化誌の中で、ナポレオンが柳と出会ったことに

は大きな意味があった。ナポレオンの墓に柳がなかったら、これほど多くの人々をセント・ヘレナに引きつけただろうか。墓のイメージが国を超えて多くの人々の口にのぼり、文章にされ、絵に描かれ、歌に歌われたろうか。柳のメランコリーな姿だけでなく、柳の強い生命力が挿木としてナポレオンの柳を世界に広めることに貢献した。柳は大衆に、想像の世界だけでなく、聖遺物のようにナポレオンを物理的に持ち帰ることを可能にした。

絶海の孤島を考えるならば、この柳とナポレオンの出会いは奇妙な偶然に思えるかもしれないが、柳の文化誌の文脈の中ではあるべくして起こった必然の出会いだった。セント・ヘレナはイギリス支配下でイギリスの植物が移入され、イギリスの風景が形成されていた。墓の柳も、芝もイギリスの風景そのものであった。自然風なイギリス風景庭園がロマンチックな連想とともに大陸に流行する中で、優美な姿の柳もイギリス庭園 (jardin anglais) によく植えられた。葬儀や死のシンボルと結びついた柳はフランスでもよく知られたものであり、柳のイコノグラフィーは、広く西欧世界のなかで共有されていた。そのような文脈のなかでナポレオンと柳が結びついたことはナポレオンにとってはある意味「幸運」な出会いだったろう。ナポレオンの叙事詩的生涯を締めくくる上で強力なシンボルを提供したからである。

そのようにして、セント・ヘレナの柳はアメリカ中西部の片田舎にすら、「ナポレオン」熱を引き起こしていたことが明らかになった。ジョンソン元大統領の「ナポレオンの柳」の逸話は、すでに忘れさられていた歌を再度思い出させ、過去の記憶をたぐり寄せる働きをした。

独立から半世紀以上が過ぎたアメリカに実際にもたらされた「ナポレオンの柳」の方は、西欧文化における柳の研究¹で考察した独立時代の「ポープの柳」より最近の出来事なので、現在でもその子孫をたどることができる。記録もよく残り、その入手過程には「ポープの柳」ほどの神話性はなく淡々としたものだった。アメリカ人にとって「ナポレオンの柳」の意

味は何だったのだろうか。ジョージ・ワシントンの住居から、西部のワシントン州にもたらされた「ナポレオンの柳」の話など、移動するアメリカ人の家系調査に対する情熱に匹敵する熱意で、木の系譜が語られているところに「ナポレオンの柳」の意味の一端を見いだすことができるだろう。植物は新たな場所に移植され、前にも増して元気に育ち、新たに再生しながら過去との連続性を保つ、それが「ナポレオンの柳」の意味ではないかと考える。

注

- 1 黒沢 眞里子「西欧文化における柳の研究 (その1) 墓石、追悼画および陶磁器を中心に」『専修人文論集』, (95): 2014年11月, pp. 1-34.
- 2 Library of CongressやBritish Libraryなど電子資料を利用したが、注が長くなるのでURLの表示は多くの場合省略した。
- 3 Harold Livermore, “Santa Helena, A Forgotten Portuguese Discovery,” in *Estudos em Homenagem a Luis Antonio de Oliveira Ramos*, 2004, (Porto: Faculdade de Letras da Universidade de Porto), p. 626. ノーヴァの艦隊がインドに向かう行きか、帰りにセント・ヘレナを見つけ聖ヘレナにちなんで命名したとされるが、現在ではこの事実に諸説があるようだ。セント・ヘレナ島では、1502年5月21日を「発見」と「命名」記念日としている (St Helena Tourism のサイト)。
- 4 両角良彦『セント・ヘレナ落日』(朝日新聞社, 1994), pp. 72-3.
- 5 Arnold Chaplin, *A St. Helena Who's Who; or, a Directory of the Island During the Captivity of Napoleon* (London: Published by Author, 1914), p. 7. [<https://archive.org/stream/asthelenawhoswho00chapiaa#page/6/mode/2up>]
- 6 Dr. B. E. O'Meara, *Memoirs of the Military and Political Life of Napoleon Bonaparte. From His Origin, to His Death of the Rock of St. Helena* (Hartford: Conn., 1822), pp. 367-8.
- 7 大熊良一『セント・ヘレナのナポレオン』(近藤出版社, 1989年)によると、訃報は7月4日ロンドンに、5日パリに、16日ローマに伝わったとされる (p. 322)。7月4日のロンドンの『クーリエ』紙では、「ナポレオン死す」として、セント・ヘレナ5月7日付の私信を元に、ナポレオンの死と死後の解剖の様子が報じられている。
- 8 *The European Magazine, and London Review*, vol. 80, London, July 1821, p. 99.
- 9 通常の墓は6フィートなのでかなり深さがある。
- 10 *The European Magazine, and London Review*, vol. 80, London, August 1821, pp. 114-9.
- 11 *The Mirror of literature, amusement, and instruction* (London: printed for J. Lim-

- berd) Vol. 1, March 8, 1823, p. 290.
- 12 *The Sydney Gazette and New South Wales Advertiser* (NSW : 1803–1842), 5 May, 1835, p. 4. [<http://trove.nla.gov.au/ndp/del/article/2198057?searchTerm=napoleon%20willow&searchLimits=sortBy=dateAsc>]
- 13 François-René de Chateaubriand, *Memoirs from Beyond the Tomb* (London: Penguin, 2014), p. 315.
- 14 Wikigallery より。ロトンに関しては、*A St. Helena Who's Who or a Directory of the Island During the Captivity of Napoleon*, pp. 33–35に、セント・ヘレナに駐留していた8人の大尉のうちの1人と説明がある。
- 15 Royal Museum Greenwich のスケッチの説明より。 [<http://www.rmg.co.uk/researchers/collections/by-type/archive-and-library/item-of-the-month/previous/capt-marryats-sketch-of-napoleon-bonaparte-after-his-death>]
- 16 “St. Helena en het graf van Napoleon,” 183? の図版。HTI Trust のデジタル資料より。 [[http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.\\$b303697;view=1up;seq=9](http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.$b303697;view=1up;seq=9)]
- 17 R. D. Keynes ed., *Charles Darwin's Beagle Diary* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), p. 427. [<http://darwin-online.org.uk/content/frameset?pageseq=460&itemID=F1925&viewtype=side>]
- 18 両角, p. 288.
- 19 ワシントンの墓の冒険に関しては、筆者の『アメリカ田園墓地の研究』（玉川大学出版部, 2000年）, p. 30を参照のこと。
- 20 C. R. Darwin, *Narrative of the surveying voyages of His Majesty's Ships Adventure and Beagle between the years 1826 and 1836, describing their examination of the southern shores of South America, and the Beagle's circumnavigation of the globe. Journal and remarks. 1832–1836* (London: Henry Colburn, 1839), p. 579 [<http://darwin-online.org.uk/content/frameset?itemID=F10.3&viewtype=text&pageseq=1>]
- 21 Syms Covington, *The Journal of Syms Covington: Assistant to Charles Darwin Esq. on the Second Voyage of the HS Beagle, December 1831–September 1836*, Chapter 8, Australian Science Archives Project のウェブサイトより。 [http://www.asap.unimelb.edu.au/bsparcs/covington/chap_7.htm]
- 22 *Sydney Gazette and New South Wales Advertiser* (NSW : 1803–1842), November 6, 1832, p. 3. [<http://trove.nla.gov.au/ndp/del/article/2209298?searchTerm=napoleon%20willow&searchLimits=sortBy=dateAsc>]
- 23 Alexander Hugo Schulenburg, “Transient Observations; The Textualizing of St Helena through Five Hundred Years of Colonial Discourse,” Ph.D dissertation, 1999, p. 113に引用。
- 24 チャールズ・ダーウィン, 島地威雄雄訳『ビーグル号航海記下』（岩波書店, 1984年）, pp. 175–6.

- 25 H. Guthrie-Smith, *Tutira: The Story of a New Zealand Sheep Station* (Edinburgh and London, 1926), p. 272. [<http://nzetc.victoria.ac.nz/tm/scholarly/tei-GutTuti-t1-body-d27.html#n272>]
- 26 *The Sydney Morning Herald*, Dec 31, 1934, p. 7. [<https://news.google.com/newspapers?nid=1301&dat=19341231&id=pupUAAAIBAJ&sjid=6JEDAAAIBAJ&pg=3265,6607291&hl=ja>]
- 27 Merriam-Webster online dictionary of 「English grass」の定義より。 [<http://www.merriam-webster.com/dictionary/english%20grass>]
- 28 *The Australian* (Sydney, NSW : 1824-1848), 15 July 1826, p. 4.
- 29 ルイ・マルシャン, 薮崎利美訳『ナポレオン最期の日』(MK 出版社, 2007年), pp. 342-3.
- 30 Francescop Antommarchi, *The last days of Napoleon. Memoirs of the last two years of Napoleon's exile, by F. Antommarchi. Forming a sequel to the journals of Dr. O'Meara and Count Las Cases*, Vol. II (London: H. Colburn), 1826, p.185.
- 31 両角, p. 20.
- 32 Antommarchi, p. 188.
- 33 両角, p. 290.
- 34 *The Australian*, op. cit.
- 35 Peter Dillon, *Narrative and successful result of a voyage in the South Seas: performed by order of the government of British India, to ascertain the actual fate of La Pérouse's expedition, interspersed with accounts of the religion, manners, customs and cannibal practices of the South Sea islanders* (London: Hurst, Chance and Co.. 1829) Volume 2, p. 387.
- 36 Guthrie-Smith, p. 273.
- 37 *The Sydney Gazette*, op. cit.
- 38 Charles Mackay, *Memoirs of Extraordinary Popular Delusions*, Vol. 1 (London: Richard Bentley, 1841), p. 172.
- 39 “Willows from Napoleon’s Grave,” *New Zealand Herald*, Volume XLV, Issue 13645, 13 January, 1908, p. 5.
- 40 *The Sydney Morning Herald*, Dec 31, 1934, p. 7.
- 41 *The Mercury* (Hobart, Tas.: 1860-1954), 25 July 1939, p. 10. [<http://trove.nla.gov.au/ndp/del/article/25596626>]
- 42 *The Mercury*, 27 July 1939, p. 5. [<http://trove.nla.gov.au/ndp/del/article/25472543>]
- 43 “Napoleon Willows,” *Morning Call*, October 28, 1894.
- 44 *Cape Cod Library of Local History and Genealogy: A Facsimile Edition of 108 Pamphlets Published in the Early 20th Century, Vol. 1*, p. 1807. [https://books.google.co.jp/books?id=OBbq13eCddYC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&

cad=0#v=onepage&q=napoleon&f=false]

- 45 Gary A. Zimmerman, "Napoleon and the Fisk," *Fisk Genealogical Foundation Newsletter*, December 2003, Vol. 11, No. 2.
- 46 Adolphus Ferdinand Monroe, *The Life and Writing of Adolphus F. Monroe* (Cincinnati: Printed for the Publisher), 1857, p. 6.
- 47 "First Coles County Clerk Murdered; Killer Lynched," *Mattoon Daily Journal Gazette*, September 1, 1955. [<http://www.eiu.edu/localite/cclhpkillerlynched.php>]
- 48 Pendleton County Historical & Genealogical Society の Nancy Bray 氏の協力により入手した手書きメモより。Barton Papers #44, CD#52 Monroe.
- 49 モンローの父親とオーリックの両親はヴァージニア州の隣接する郡に住んでいたことが家系資料をたどると分かり、両家はヴァージニアの同郷者同士であった可能性が高い。さらに、モンロー家は、アンセストリ・コムで祖先をたどると、第5代アメリカ大統領ジェームズ・モンロー (James Monroe) ともつながっていた。大統領の曾祖父でスコットランドから移民してきたアンドリュー・モンロー少佐 (Maj. Andrew Munro) を曾祖父とし、古代スコットランド高地モンロー族の長である第14代ファウルズ男爵ロバート・モンロー (Sir Robert Munro, XIV of Foulis) を祖先にもつ。
- 50 William Cole Daugherty, "From the Sublime to the Ridiculous: The Image of Napoleon Bonaparte in the American Literary Renaissance," 2001, Ph.D. dissertation, p. 29.
- 51 *The Cairo Bulletin* (Cairo, Ill.), August 4, 1875, *Memphis Daily Appeal* (Memphis, Tenn.), August 8, 1875などの新聞記事参照。
- 52 Tennessee Urban Forestry Council の Andres Johnson Willows, Greenville の説明より。 [<http://www.tufc.com/registries.html>].
- 53 "Johnson's Last Words. His Will—Value of the Estate—Relic Hunters—The Grave," *Nashville Union and American*, August 11, 1875.
- 54 "Napoleon's Willow," *The Opelousas Courier* (Opelousas, La.), November 20, 1875.
- 55 C. Gaylord, *The Campaigns of Napoleon Buonaparte: Embracing the Events of His Unexampled Military Career, from the Siege of Toulon, to the Battle of Waterloo. Also, the Period from His Abdication of the Throne, to His Final Imprisonment and Death, on the Rock of St. Helena* (Boston: Charles Gaylord, 1835) の最後に引用されている。